

〒639 1042  
奈良県大和郡山市小泉町562 67  
佐藤 良士  
0743 53 4003

「万葉ラブストーリー」第三回応募作品

# 「佐保の春」

## 登場人物

山本保子 主婦、四十二歳  
山本芳江 保子の義母、七十二歳  
山本ゆき 保子の娘、十七歳  
春山 介護福祉士、二十八歳

### 山本家ダイニング(夜)

対面キッチン。洗い物をする保子(四十二)とゆき(十七)。  
芳江(七十二)がテーブルに半紙を広げ、左手に筆ペンを持  
って万葉歌を書いている。

芳江の傍らに、ノートが置かれている。

保子「お母さん、それ、お母さんが選んだ歌？」

芳江「違うの、これ、私の生活ノートに書いてあったん」

ゆき「生活ノートって何なの？」

芳江「デイでね、今日おばあちゃんがどんなことをしてたんか、  
書いていてくれるんよ」

保子「介護士の春山さんでしょ。お母さん、いい人が担当でよかつ  
たやないの。万葉集が趣味なんやてね」

### 芳江のノート

表紙。「佐保川デイサービス 生活ノート」。

### タイトル

### デイサービスセンター、正面玄関(回想)

「佐保川デイサービスセンター」

### 同、廊下(回想)

女性の介護士に車椅子を押してもらって見学をする芳江。

### 同、事務所(回想)

来客用のテーブルに、保子と、介護士の春山(二十八)が向  
かい合って座っている。

春山「おばあちゃん、脳梗塞の後遺症はもう安定しているんですか」  
保子「右半身は不自由なんですけど……、病院では今以上の回復は  
無理やて言われてるんです」

春山「そうですね。でも普通に生活出来るんなら、ここで皆さんと  
一緒に楽しく過ごされたら、リハビリにもなると思いますよ」

保子「病院でもそう言われました。ドンドンいろんなことにチャレ  
ンジして下さい」

春山「おばあちゃんは、趣味というか、得意なものというか、そん  
なものがあつたら教えて貰えないですか」

保子「別に得意ということではないんですけど、最近、万葉集の勉  
強を始めたんです」

春山「へえ、そうなんですか。僕も今、万葉の歌を読むサークルに  
入ってるんですよ。おばあちゃんとは話が合いそうですね」

### 山本家ダイニング、テーブル

芳江の万葉歌を覗き込む保子とゆき。多少たどたどしい字で

千鳥鳴く 佐保の川門の 清き背を 馬打ち渡し いつか通らむ 家持
-------------------------------------

ゆき「……いえもちって誰」

保子「やかもち。大伴家持。万葉集に一番沢山歌が載っている人」

ゆき「家持……さんは、馬に乗っていつか佐保の川を渡りたい。そ  
ういうこと？」

保子「そうでしょ」

ゆき「何で、佐保の川を渡りたいんやろ？」

保子「さあ……、（芳江に）どうしてなんやろね？」

芳江「坂上郎女に会いに行くの」

保子「坂上郎女って、家持の叔母さんだった人でしょ」

芳江「家持は叔母さんの郎女が好きだったんよ」

### 玄関前の道路（朝）

芳江が介護士の春山の援助でデイセンターの送迎バスに乗り  
込もうとしている。

保子が小さなカバンを持ってあわてて出てくる。

保子「春山さん。これ、お願いね」

春山「（玄関に戻って）いいですよ。おばあちゃんのですね」

保子「家持の歌が好きなんです」

春山「え、？」

保子「千鳥鳴く、佐保の川門の……」

春山「あ、この前の歌ですか」

保子「私は坂上郎女の歌が好き。確か佐保川が出てくる歌があった  
でしょ」

春山「ああ、知ってます、知ってます。柳も出てくるんですよ」

保子「ええ、そう、柳も出てくるの」

バスの後ろに車が来てクラクションを鳴らす。

「スミマセン」と言いながら、あわててバスに乗り込む春山。

同

バスを見送る保子。小さく口ずさむ。

保子「うち上る 佐保の川原の 青柳は 今は春へと なりにける  
かも」

### ダイニング（夜）

テーブルで習字をする芳江の後姿。

保子の声「うん、大丈夫、お母さんデイが気にいったみたい。担当の介護士の人と話が合うみたいよ。……え、違うの、男の人よ、まだ若いけど……」

同

電話をする保子

保子「面白いんよ。趣味が万葉集。だから年上の人に人気があるみたい。……あなた五月の連休には帰れる？……そう、忙しいのね。でも、八月いっぱいですっちの仕事は終わりですよ。それまでの辛抱ね……。ゆきね、奈良女子大に行きたいって。私やお母さんの夢を、ゆきが叶えてくれるかもしれない……」

同、テーブル

芳江の書いた万葉歌を見つめる保子。微笑しながら、  
保子「（咳く）……坂上郎女でも、歌が違っわよ」

テーブルの上の万葉歌

我が背子が 見らむ佐保道の 青柳を 手折りてだにも 見むよしもがな 郎女
---

### ダイニング（朝）

紫色のスーツ姿で外出の支度をする保子。ゆきが入ってくる。

ゆき「どうしたの、お母さん。そのスーツ？」

保子「お母さんだって、これぐらいのおしゃれはするわよ」

ゆき「お芝居でも見に行くの？」

保子「ううん、おばあちゃんの様子を見てこようと思って、それにゆきが受けたっていう奈良女子大も見ておきたいし……」

奈良の町

近鉄奈良駅から出てく保子。

興福寺、登り大路。春日野を歩く保子。東大寺。みやげ物屋。

鹿。大仏殿。転害門から一条通りに出る保子。

佐保川に佇む保子。奈良女子大。記念館。

女性合唱の奈良のわらべ歌が聞こえてくる。

「奈良の 奈良の 大仏さんは 天火に焼けて

アリヤ ドンドンドン

コリヤ ドンドンドン  
正面どなた うしろに誰がいる？  
(老人の声) やまもとさん  
違いました 違いました 舟のかけ

#### 佐保川デイサービセンター、集會室

老人たちが椅子に座って集まっている。  
その前で「わらべうた、奈良の大仏さん」を歌う数人の若い  
女性たち。一人がオルガンで伴奏している。歌詞カードを見  
ながら歌う老人たち。

その光景を保子と春山が廊下で見ている。

春山「ボランティアで来て貰っている、女子大の学生さんなんです」  
老人たちの後ろのほうに座っている芳江が、保子に気付き、  
軽く手を上げる。芳江に手をふる保子。

#### 同、庭

ゆっくりと歩く保子と春山。

保子「大仏さんの歌って、面白いわね」

春山「皆さん、楽しそうでしょう。歌が一番人気があるんです。元  
氣が出ますしね」

保子「そうですね。でも、何か違うみたい」

春山「違ってます」

保子「私ね、生意気やけど、介護士の人達って、年寄りはみんな子  
供みたいになってほしいって、思ってはるような気がするの」

春山「確かに、そういうところがありますね」

保子「でも、お年寄りでも、もっといろんなことが出来るんやない。

一人一人やりたいことが違うと思うの。そりゃあ、歌が好きなら  
も沢山いるでしょうけど、これからのお年寄りは、もっといろん  
なことにチャレンジ出来るはずよ」

春山「おばあちゃんの万葉集みたいにですね」

#### 同、玄関

保子を見送る春山。

春山「明後日のお花見、僕達の万葉サークルもボランティアで参加  
するんですよ」

保子「みんな若い人？」

春山「ええ、僕と同じぐらい。その時、万葉の歌の短冊を用意して  
おいて、みんなで桜の枝に結ぶんです。おばあちゃんみたいに自  
分で書かれる人には、自分のを結んで貰うんです」

保子「楽しそうね」

春山「山本さんも、おばあちゃんと一緒に是非来て下さい。好きな歌の短冊を持って」

### リビング(夜)

芳江がテレビを見ている。

保子の声「お母さん、明後日のお花見、ご家族の方も参加して下さいって書いてあるわ。私がかから車椅子押していくから、一緒に行く?。ボランティアの人に押ししてもらうの、嫌でしょ」  
芳江「保子さんが行ってくれるんなら、そのほうがいいわ」

### ダイニング

保子がデイ・センターの生活ノートを見ている。

保子「今日は万葉歌の習字はしないの?」

### ノート

今日の生活ノートの末尾に春山の字で万葉歌が書いてある。

『紫の におえる妹を憎くあらば 人妻ゆえに吾恋ひめやも』

芳江の声「ご飯の前に書いてしまったよ」

保子の声「見せて」

芳江の声「いいよ。私の部屋の机の上にあるから」

### 万葉歌の習字

多摩川に さらす手作り さらすらに なにぞこの見の こころだ愛しき
--------------------------------------

保子の声「小さくつばやく」お母さん、これ違うでしょう」

### 芳江の部屋

芳江の習字を見つめる保子。

保子「(少し涙声で)でもこれ、お母さんの一番好きな歌やったね…

…。お母さんは東京生まれやもんね」

間

保子「ごめんね。お母さん、私…どうしたんやろ…」

### 佐保川

満開の桜。人の流れ。

デイ・センターの老人たち。ボランティアの若者たち。

何人かの車椅子の老人と車椅子を押す若者。

春山。春山に寄り添う若い女性。

同

短冊を桜の枝につるす老人たち。  
春山と連れの女性が同じ桜の枝に短冊を吊るしている。  
見つめる保子。  
保子の視線に気付き、頭を下げる春山。連れの女性も同じように頭を下げる。

同

芳江の短冊を桜の枝に吊るす保子。  
保子「これ、この間、習字していた東歌ね」  
芳江「保子さんは、短冊書いてないの？」  
保子「(短冊を出して見せながら)私のはこれ……」  
芳江「ああ、これ、確か坂上郎女の娘よね、何ていった？」  
保子「坂上大嬢。家持の奥さん。これ家持と結婚したころの歌よ」  
芳江「でも、秋の歌じゃないの」  
保子「お母さん、うちの家持さんが単身赴任から帰ってくるのは八月でしょう。だからね、私のお花見は秋までお預け」  
桜の枝に短冊を吊るす保子。  
保子「ねえ、お母さん、これから奈良女子大のほうに行ってみない」  
芳江「ゆきが入る学校だもんね」  
保子「お母さんも万葉集の勉強をしに行きたいんでしょう」  
芳江「そつ、佐保川を渡ってね」

短冊

我が蒔ける	早稲田の穂立て	作りたる
鬘そ見つつ	偲ばせ我が背	大嬢

遠ざかる保子と芳江の遠景。

(完)